

花王教員フェローシップ「ベトナムのチョウ」体験報告書

■報告者：佐藤 昌平（神奈川県川崎市立荻宿小学校教諭）

□調査日時：2005年8月15日～23日

2年半ぶりのベトナム。ハノイ、ノイバイ空港の周りの田園風景が飛行機の窓に映ってくるにつれ、懐かしさが募ってきた。

私は、2000年4月から2003年3月まで3年間ハノイで生活していた。ハノイはいわば第2の故郷である。



「タムダオ」とはベトナム語で「タム（三）」「ダオ（島）」を意味する。雲海の上に見える3つの頂上を島

に見立てた昔の人の想像力には頭が下がる。タムダオは、三つの島 タムダオ
20世紀初頭にフランス人によって開発され、第2次世界大戦以前には、フランス人の週末の避暑地として栄えていた。最盛期には大きなフレンチビラが300軒も建ち並んでいたそうである。しかし抗仏戦争の際にベトナム軍によって破壊され、今ではその痕跡を残すだけとなっている。その後、東京近郊で言えば箱根や熱海のような立地条件を生かして（ハノイより70km）ホテルが建ち並び、週末のにぎわいを見せる現在をむかえている。

タムダオ国立公園は、ハノイ日本人学校在籍時にも現地理解のための研修場所として計画したことがある。しかし、山ビルや毒蛇の存在により結局実行はされなかった。私自身も、ハノイ在住の頃に1度出かけたことがある。そのことについては、ルートトランセクトのところで、また述べたい。

ベトナムのチョウの調査方法は、以下のものであった。

- ・5つのルートトランセクトと、今回新たに作り出した6つ目のルートトランセクトを歩きチョウを発見する。
- ・目視で識別できたものはそのまま、識別しにくいものは捕虫網でつかまえて、確認した後に放す。
- ・トランセクトで確認したチョウの種類と数を記録していく。

ルートトランセクトは大きく3つに分けられた。一つは、開かれた場所である。主任研究者のリエンさんは「ロード」と呼んでいた。道路に沿って観察して行く。道路はアスファルトで覆われていた。ここには高地であることを生かして、スースーと呼ばれるタムダオ特産の隼人瓜が道ばたにも畑にも植わっていた。



隼人瓜の畑で



二つ目は、通称「タワー」テレビ塔である。こちらは、山の頂上まで行けるように登山道が整備されている。実は、2000年にも息子を連れてこの山を登ったことがある。しかし、

その頃はベトナム語を知らなかったので、塔の先があることを知らずに引き返したのだった。こちらは、林の中を通り最後に頂上の開けた場所に至る。頂上では、ハチがトンボを捕まえ、首をかみ切って食べるという、普段ではなかなか見られない様子を見た。自然の厳しさがうかがわれた。

三つ目は、通称「フォレスト」である。こちらは以前、熱帯雨林と竹林の中を進むルートであったのだが、現在は道路を造る作業が行われていた。切り開かれたむき出しの露頭は、環境の悪化を物語っていた。また、既にできていた道路も、大雨のために崖崩れを起こしている場所も見られた。

ここで働いている人達は、出稼ぎに来ている人で休み無しに働くそうである。あの暑い中、よく働けると感心した。



しかし、それだけ働いても月50ドル程度の給料しかもらえない。

ベトナムの人もまた写真が好きだ。しかし、ベトナムでは写真1枚2500ドン（日本円にして20円）である。これは決して安いとは言えない。ましてや自分でカメラを持つことはまだ一般的でなく、カメラマンという仕事が成り立っている。



道路を造っている人達の写真を撮った。すると、会うたびに「写真はどうした」と話しかけてくる。心から楽しみにしていることがうかがわれた。ようやく渡すと、それはもう

大喜びで、「とってもきれい！家に帰ったら、家族に見せるんだ。」と、うれしそうに話してくれた。少ししか話せないのではあるが、ベトナム語ができる良さを感じた瞬間だった。

この「フォレスト」では、新たなルートランセクトの作成も行った。竹林の中を10メートルの長さのひもを伸ばしてはたぐり、100メートルごとのセクションを作っていく。簡単そうに見えて、実はこれが恐怖なのである。山ビルの存在である。ちょっと足を滑らせてしりもちをつくとも山ビルがもうくっついていていた。しかし、新たなルートランセクトを開発したという充実感がそこにはあった。

この体験を通して、学んだことがいくつかある。それは以下の通りである。

- ・ルートトランセクトという調査の手法。
- ・チョウに対する知識。
- ・アメリカの教員の感じ方も私たちと変わらないこと。
- ・環境を守るという視点。



私の現在担任している4年生の理科の学習に「生き物の一年間」がある。

小学校学習指導要領によれば、この学習の目標として

「身近に見られる動物の活動や植物の成長を季節と関連付けながら調べ、見いだした問題を興味・関心をもって追究する活動を通して、生物を愛護する態度を育てるとともに、動物の活動や植物の成長と環境のかかわりについての見方や考え方を養う。」

とある。

この学習では、1年間を通して動物の活動や植物の成長の様子を観察し、季節と関連付けていく訳だが、これがなかなか難しい。観察の観点が決まっていないと、子ども達が何をすればよいのかが分からず、はい回る学習になってしまう。

川崎市小学校理科研究会では、観察の観点をはっきりさせ、共有化させるために「自分の木とクラスの木」という観察の仕方を提案している。この方法は、植物の成長や変化の観察に対して大変有効であるが、動物の活動の観察については提案されていない。そこで、今回学んだルートトランセクトの手法をこの観察に生かせるのではないかと考えている。ルートトランセクトの手法は、「自分の木とクラスの木」の手法と同様に子どもにとって観察の観点をはっきりさせ、観察の観点を共有化させると考えるからである。

また、今年度苅宿小学校に、ピオトープができた。昨年度、私とともに6年生が作ったピオトープが好評で、50周年の記念事業として予算がついてできたものである。しかし、ピオトープはできてからが、始まりである。このルートトランセクトの手法を生かし、総合的な学習の時間で、このピオトープができたことによる、生物の変化を調べていきたいと感じている。

2年半ぶりのハノイ、変わったものと変わらないものがそこにはあった。

高度経済成長期にあるベトナム。物価の上昇が著しかった。2年半前4000ドンから6000ドンだったフォーの値段は、7000ドン以下では買えなくなっていた。鶏インフルエンザ以降の食材の価格は高止まりなのだそうである。ベトナム人の友達の一は「今のベトナム人は、お金のことばかりで、好きになれない」と、話していた。確かに、前に行っていた店の知り合いが、今回はやけに世知辛くなっていて、悲しい思いもした。ハノイには郊外店型の大きなスーパーもでき、新しく開発されている住宅街には凱旋門のようなものまでできていた。

ハノイ時代のベトナム人の友達で特に会いたい人が4人いた。4人のうち3人までは、この2年半で結婚したり引っ越ししたりと生活が変わっていた。そして、ついにその中の一人とは会えなかった。

しかし、心の温かさは変わっていなかった。家に招き、歓待してくれて、おみやげまで頂いてしまった。

そして、この文章を書いているうちに、ふと思い出し、メールのチェックをすると、会えなかった残りの一人からメールが届いていた。彼女もまた結婚して引っ越し、6月に子供が生まれたためにメールのチェックができなかったのだそうだ。

最後に、このような機会を設けてくださった花王株式会社・アースウォッチジャパン、そして現地でお世話になった、リエンさん、アインさん、ヴィエットさん、一緒に行動してくださったボランティアの方達、特に得意の英語で私の言わんとしていることを伝えてくださった坂本さんに感謝してこの報告を終わりたい。

